2013 10/22
No.1957
毎月第2・第4火曜日発行

政経かながわ

一般社団法人
—神奈川政経懇話会—

鶴岡八幡宮（鎌倉市雪ノ下）で６日、崇敬者大祭が行われ、流鏑馬（やぶさめ）神事が奉納された。境内に作られた約250㍍の馬場を小笠原流の射手が疾走、馬上から的を狙い命中させるたびに歓声と拍手が湧き起こった。

神奈川新聞社

政経かながわ

2013 10/22 No.1957

contents

視点・点描 3
ふるさとの原風景を守る

講演録 4
「最近の金融経済情勢について」
日本銀行横浜支店長　　竹澤　秀樹

経　済 8
「企業重視」に潜むリスク
重要性増す成長戦略

経　済 10
広がる糖質控えめ食品
大手コンビニが全国展開

インタビュー 12
民維み有志で新党を
100人超が理想

くらし2013 14
乳がん受診のアドバイザー制度

広告珍談 16
～うまい物がたり㉕
ヴェルサイユのアジ！

NNAアジア経済リポート 17

神奈川景気データファイル 18

視点点描

ふるさとの原風景を守る

黄金色の稲穂は秋空に映える。初夏の田植えから4カ月、季節はめぐり収穫の日を迎えた。秦野市名古木（ながぬき）の棚田に米作りのボランティア約90人が駆け付けた。それぞれのいでたちで鎌を持ち、1メートルほどに育った稲をていねいに刈り取り、手際よく束ねた。

里山に囲まれた標高150メートルほどの山あい、ノスリらしき甲高い声が上空に響く。農作業のリーダーは市内の南米音楽演奏家、木下尊惇（たかあつ）さん（50）＝写真。作業着が板につき、ステージでギター演奏する姿を想像しにくい。

「梅雨がいつもと違い心配したけど、いい出来だよ」。日焼けした笑顔から白い歯がのぞく。

ボリビアでフォルクローレの修行を10年以上続けた。プロの音楽家としてステージに立つ傍ら、原発事故の避難生活者を元気づける演奏会を福島で続ける。

耕作放棄された棚田をNPO法人「丹沢ドン会」が復元、11回目の収穫となった。「都会出身の参加者も農作業に慣れ、里山の自然環境も戻ってきた」。活動全体を引っ張り、市内で小さな出版社「夢工房」を経営する片桐務さん（63）は、満足そう。

雑木林に囲まれた水田、小川の水音、トンボが舞いカエルが跳ねる、あのふるさとが戻った。日本の原風景ともいわれる。いま国土の約4割（約1600万ヘクタール）はこうした「里地里山」なのだ。

コナラなどの雑木林は薪炭林として生活の場、水田は多様な水生生物の生息地であった。炭焼きは姿を消し、後継者のいない水田は耕作放棄された。人の暮らしがなければ里地里山は荒れる。ふるさとの原風景は失われつつある。

だからいま、NPOや都市住民の力が必要となった。名古木などでの市民活動が認められ、秦野市は2004年、環境省の「里地里山保全再生モデル事業」として全国4カ所の一つに選ばれた。

収穫のお祝いは11月24日。各種飲み物が並ぶ棚田は、南米音楽フォルクローレ演奏を聴きながらの祭り（大宴会）が展開される。毎年、この日だけの参加者もいる。

（神奈川新聞社編集局次長　小野　明男）

広告珍談 ～うまい物がたり㉕

宮野　力哉

ヴェルサイユのアジ！

ギリシャ神話がおもしろい。なにしろ神さまなのに、やりたい放題。なかでも最高神とうやまわれる、ゼウス（ユピテル、ジュピターともいう）のすごいこと。画家たちが想像をめぐらす、絶好の題材であった。

黒い雲に変身したゼウス。イオを包みこんで思いをとげ、うっとりする彼女を描いたのはコレッジオ。つぎは白鳥に化けて、人妻レダと愛をかわす。プーシェの画面は美しすぎるほど。黄金の雨になって、体内にしのびこまれたダナエを、クリムトは濃厚に描いた。

美の女神ヴィーナス（アフロディテ、ウェヌス）も負けてない。鍛冶の神さまヘパイストスが夫でありながら、戦いの神さまアレス（マルス）といちゃっこ。ボッティチェリはぐったりした軍神を描いた。

そんなこんなの神さまのひとり、ポセイドン（ネプチューン）が青銅のヒヅメと黄金のタテガミをなびかせる、海馬ヒッポカンポスが引っ張る凱旋車に乗って、さっそうと海原を走る。ヴェルサイユ宮殿の広大な庭園にある、海の神さまの巨大な彫刻である。

太陽王と呼ばれたルイ14世が、王権の象徴として建設したヴェルサイユ宮殿。キラキラした鏡の間もいいけれど、ル・ノートルが設計した庭園がもっとすばらしい。

その太陽王がJAP　SOYA、すなわち日本のしょうゆで調理された宮廷料理に舌鼓をうったという。17世紀のこと、だれが王の国へもたらしたのだろう。

1765年、フランスの作家・思想家ディドロが編纂した《百科全書》に、しょうゆの項があるほど、JAP　SOYAは知られていた。もちろん、エライ人だけ。

74（安永4）年に来日したスウェーデンの医師ツンベルグは、「多量の醤油樽がバタヴィア、印度及び欧羅巴に運ばれる。和蘭人は醤油に暑気の影響をうけしめず、又その発酵を防ぐ確かな方法を発見した。和蘭人は、これを鉄の釜で煮沸して瓶詰とし、その栓に瀝青を塗る。かくの如くすれば醤油は、よくその力を保ち、あらゆるソースに交ぜることが出来る」（『日本紀行』山田珠樹訳）。樽はジュカルタ経由ヨーロッパへ渡った。

オランダの文献によると、しょうゆが初めて輸出されたのは江戸初期の1616（元和2）年、長崎から東インド会社によってオランダへ、さらにフランスへ運ばれたとか。68（寛文8）年に12樽。1711（正徳元）年には745樽も輸出された。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）

（図） いまは見ることができないしょうゆ樽。明治29年掲出のヤマサ醤油の広告より